

田中仁先生を憶う

田中仁先生が今年4月14日にお亡くなりになったことについては、しばらく経ってからその報に接した。突然のことで、こころからのお悔やみを表明いたします。田中先生には大変お世話になり、たいへん悲しくつらく感じております。

今振り返ると、田中仁先生のお名前は、日本留学時代に『中国近代化過程の指導者たち』（曾田三郎編）という本を通じて知っていたが、直接、お目にかかるようになったのは、私が大阪外国語大学大学院に入って確か先生担当の「中国近代政治史像の再検討」という講義が開いた1998年春季のころであったと記憶しています。まず、先生はうわひげの温顔で、やや早口で物静かにお話になるのが印象的でした。いつも中国からの留学生のことを気にかけてくださいました。そのことに対する感謝を、わたくしは忘れません。

それまでの私のあたまに入っていた近代史研究は、どちらかという、観念形態的なものでありましたが、先生の講義は、史料にもとづき、研究の現状を批判的に検討するもので、両大戦間期に関する中国政治史研究では、国民政府研究を中心に実証研究の蓄積とそれを踏まえた新たな歴史像の提起を重視されたご研究は、私に新しい感覚を与えてくれました。先生の講義に一年間出席させてもらいましたが、その頃の思い出に、また、先生に誘われて、夏の共同研究合宿や研究会に参加したり、よるいっしょにビールやお酒を飲んだりしていたことが目に浮かぶ。先生は中国産の赤いラベルの紹興酒も好きでした。

先生は、近現代中国史の研究に多くの業績を残されました。先生を喪いましたことは、日本、中国および国際中国史学界にとりまして、多大な損失であることは言うまでもありません。

私ども日本留学を終えて、帰国して以降も、日本・中国大陸・台湾・韓国などの各地で開催された国際セミナーにおいて先生と常に意見交換をしてきた。とくに、『フフ・トク/青旗』誌を内モンゴル大学出版社から刊行する計画にあたって著作権の交渉や原本複写などにきわめてご尽力されてくださいました。このようなご苦勞を意に介さ

れぬ先生の親切をいつまでも忘れることはできません。

2014年4月から一年間、私とナランゲレルが日本滞在中で、田中先生は、なにかと私たちの研究と大阪滞在へ御協力・御援助くださいました。戦前期モンゴル語新聞『フ・トク/青旗』に関する共同研究プロジェクトを計画するため、お久しいことで、先生にお目にかかり、お話をうかがう機会を得ましたが、そのたびに近代内モンゴル植民地史研究の該博な知識の一端に触れ、また、週に一回田中ゼミに出席させていただき、先生の学恩に与って過ごした日々であったと思われます。

2020年夏から、ながらく闘病生活を続けておられると聞き及び、心配しておりましたが、ついに鬼籍に入られたとのお話を伺い、痛惜の念に耐えない次第であります。思い出は尽きませんが、これまで田中先生より頂いたご厚誼、学恩に深く感謝しつつ、今はただご冥福をお祈りするばかりであります。



2011年8月内モンゴル大学で開催された「現代中国と東アジアの新環境」

第五回国際シンポジウムで講演される田中仁先生

内モンゴル大学モンゴル学院 周太平